

小平教授と Princeton の思い出

河田敬義 (数学)

小平邦彦教授 (以後小平君と呼ばせていただこう) とは昭和 10 年に理学部数学科に入学して以来のお附合で、思い出も多い。小平君は数学科と物理学科の両方を卒業した。初め短期間東京文科大学で、ついで東大理学部の物理学科および数学科で教えられた。昭和 10 年～13 年の学生時代は、新しい数学にふれて、実に楽しい時代であった。しかし、やがて戦争が本格的に進ん

で来ると、世間一般の見方では“呑気に”数学など勉強している時代ではなくなって来た。昭和 19 年になると、もう東京での生活はできなくなって来た。その時小平君は率先して、物理学教室および数学教室の一部を長野県の諏訪に疎開させた。この時の実行力は高く評価されている。疎開先の山村で小平君は一人で研究にうちこんでおられた。その研究結果は学士院記事にシリーズと



小平邦彦教授 (多様体論国際会議場にて)

して発表された。これらは戦後まとめて一つの大きい論文として、Princeton の H. Weyl 教授に送った。これが *Annals of Mathematics* に発表された有名な調和積分の理論である。Weyl 教授は自分の Riemann 面の理論が多変数の場合に美しく拡張されたことを非常によく見て、早速に小平君を Princeton の高級研究所に招いた。1949 年夏のことである。

これから小平君の Princeton 時代がはじまる。1954 年の Amsterdam での万国数学会議 (Congress) で、Fields 賞を受賞するまでの数年間は、多変数 Riemann-Roch 定理をめぐる複素多様体の解析的理論の研究がなされた。Amsterdam では、Fields 賞は Weyl 教授の手で小平君に渡され、Weyl 教授による業績の紹介がなされた。これは Congress の Proceeding に印刷されているが、Weyl 教授が小平君をどんなに高く評価していたかということがよく分る。

Princeton の高級研究所は、戦後外国に行くことの不便な時代に、多くの日本人を受け入れてくれた。私も、1952 年夏から 54 年春まで滞在することができた。それ以前にも、Princeton には理論物理の湯川・朝永両先生や、数学の角谷、岩沢、矢野の諸氏等がおられたが、私の行った年には、数学で、佐々木重夫、後藤守邦、山辺英彦の諸氏、物理の南部陽一郎、木下東一郎氏、地球物理の岸保教授、化学の田丸教授も来られて、大そう日本

人の賑かな年であった。小平君は、二人の小さいお嬢さんも一しょに楽しい家庭をもっておられ、新らしく来た大勢を一家あげてころよく受入れて下さった。われわれの多くは家族とはなれて単身ということもあって、だんだんと馴れなれしくなって、毎週週末には日本人パーティのような形で小平君の家に集まってしまった。本当に今日考えると冷汗の想いである。

小平君は、アルコール類は余りたしなまないようであるが、甘い菓子など好物のようであった。もっとも、その頃日本ではまだおいしい菓子などほとんどなかったといってよい。小平君はまたいろいろの種類の本を沢山に買って来た。何時読むのか分からないが、いろいろの事に通じていた。Time や Newsweek などにも目を通して、いろいろの面白い News を聞かせてくれた。また小平君のピアノ、夫人のバイオリン等音楽一家であり (後に二人のお嬢さんはピアノとバイオリンを本格的に修業したのであるが)、沢山のレコードや楽譜を持っていた。要するに、故郷をはなれたわれわれにとって、余りにも暖い場所が、そこにあったのである。

さて、小平君の研究にとって、Princeton の D. C. Spencer 教授の存在は見逃すことができない。Spencer 教授の人柄は卒直で、よいアメリカ人の一つの典型である。疲れを知らない研究一途のうちに、いたわりと善意に満ちており、小平君と大に通じるところがあったのであろう。大学で開かれた毎週一回の小平—Spencer のセミナーは、人数は多くはなかったが、活気に溢れていた。私も専門外ながら 2 年間出席した。ここでは当時流行となった層の理論、層係数のコホモロジー論などが話題となるが多かった。実際、ほとんど毎月のように National Academy の Proceedings に Kodaira—Spencer の報告があった。Hodge 多様体が射影空間に埋めこまれるという話や、またドイツから来ていた若い F. Hirzebruch の Riemann-Roch 定理の証明など、このセミナーで聞いた話であって、今日まで感銘が深い。

小平君にとって、この頃は年令としてほぼ 40 歳であり、そこまでの研究がいわば前手であった。その後さらに複素構造変形の理論、複素曲面分類理論等の大きい研究がつづく。Princeton 大学から、Harvard 大学、Johns Hopkins 大学、Stanford 大学をへて、ついにわれわれ多くの希望をかなえて、1968 年夏に東大に復帰された。東大在職は 7 年間ほどであったが、その間多くの後継者を育てた。一昨年東京で開かれた多様体論国際会議では、小平君の門下生の多くの研究発表をふくんで、我が国のこの分野での業績を示すことができたことは、小平君にとってもうれしいことであつたらう。ただ

東大紛争があったり、また心ならずも理学部長をつとめなければならなかったことは、小平君自身にとって研究の時間と精力とを奪われた点で気の毒であった。公への奉仕は尊いことであるが、広い目で見えて考えるべきであ

ろう。しかし、小平君は還暦をすぎても、まだ十分に研究を進めていかれるにちがいない。御健勝を祈る次第である。